オサーマ・ビン・ラーデン研究序説

――テキスト分析に向けて――

保　坂　修　司

はじめに
Ⅰ　9月11日以前のインタビュー
Ⅱ　声明など
Ⅲ　事件後の声明等
Ⅳ　10月7日のビデオ声明
Ⅴ　11月3日のビデオ声明
Ⅵ　その後のビデオ――あるいは詠うテロリスト――
おわりに

はじめに

2001年9月11日以降，オサーマ・ビン・ラーデンに関して多数の著作が現れた。ところが，事件のインパクトがあまりに大きかったためか，彼の実像を把握することがきわめて困難になっている。世界中で数え切れないオサーマ本が書かれ，もはや報道をきちんとフォローすることすら不可能である。メディアが描くオサーマ像は多くの場合，さまざまな立場，視点，宗教，あるいはイデオロギーで化粧されている。無辜の民を殺害するテロリストとしてのオサーマと超大国アメリカに立ち向かう英雄としてのオサーマ。この二つを両極として，大半のオサーマ像はそのあいだのどこかに位置づけられることになる。

ただし，こうした位置づけも，ほとんどが出所の怪しい資料にもとづいているといわざるをえない。多くはアラブ世界の噂話（やその類のもの），アメリカから漏れでる「極秘情報」，あるいは意図的な捏造・歪曲だ。これでは正確なオサーマ像を構築することは不可能である。これら不確かな情報を排除し，できるだけ中立な立場でオサーマの思想や行動の本質に迫るには，過去に遡って彼の言行に直接立ち返る必要がある。

ところが，いざ一次資料を再読しようとすると，そのなかにもろもろの異物が混入していることがわかる。オサーマに関する資料批判的なテキスト研究は従来存在していなかった。そこで，筆者は，オサーマ像再構築の前段階として，これまでの彼の発言を幅広く収集し，実証的な資料批判を行っていくこととする。オサーマはすでに1980年代からメディアに登場している。だが，本稿では原則として彼が西側メディアにデビューした1993年以降の発言をあつかうものとする。これは主としてそれ以前のものが入手困難であるためである。また分析の便宜上，9月11日事件を境

第１表　オサーマのインタビュー

	日付	メディア	種類	言語	場所
1	1993／12／３	インデペンデント（英）	新聞	英	ス
2	1996／５／６	タイム（米）	雑誌	英	ス
3	1996／６／16	ローズルユースフ（エジプト）	雑誌	亜	英
4	1996／７ /10-11	インデペンデント（英）	新聞	英	ア
5	1996／10	ニダーゥルイスラーム（豪）	雑誌	英・亜	ア
6	1996／11／27	クドスルアラビー（英）	新聞	亜	ア
7	1997／２／20	チャンネル・フォー（英）	テレビ	英	ア
8	1997/ ５ /11	CNN（米）	テレビ	英	ア
9	1997/ ５ /14	フクーク（英）	ニューズレター	亜	ア
10	1998／６／10	ABC（米）	テレビ	英	ア
11	1998／６／15	ニューズ（パキスタン）	新聞	英	ア
12	1998／８／27	フランス・ソワール（仏）	新聞	仏	ア
13	1998／12／25	BBC・シャルクルアウサト（英）	テレビ・新聞	英・亜	ア
14	1999／１／２	ABC（米）	テレビ	英	ア
15	1999／１／11	タイム（米）	雑誌	英	ア
16	1999／１／11	ニューズウィーク（米）	雑誌	英	ア
17	1999／６／10	ジャジーラ（カタル）	テレビ	亜	ア
18	2000／11/13	ラァイルアーンム（クウェート）	新聞	亜	ア

（注）　言語の「亜」はアラビア語，場所の「ス」はスーダン，「ア」はアフガニスタン。
　クドスルアラビーはロンドンで発行されているアラビア語日刊紙で，もっとも積極的にオサーマに関する報道を行ってきた新聞のひとつである。編集長のアブドゥルバーリー・アトワーンは９月11日事件後，内外の映像メディアにも引っ張りだことなり，とくにBBCやジャジーラには頻繁に登場，オサーマの立場を解説する役目を果たしていた。ちなみに同紙は現在でもオサーマに対し「シェイフ」という敬称をつけている。なおこの記事は写真を含め2001年９月29-30日付号に再録されている。
（出所）　筆者作成。

にテキスト群を二つにわけている。

Ⅰ　９月11日以前のインタビュー

１．信憑性の高いもの

オサーマ・ビン・ラーデンの西側メディア公式デビューは1993年12月３日付英『インデペンデント』紙であった。これは，いわゆる一問一答形式ではなく，ロバート・フィスク記者の構成になる通常の記事形式になっている。９月11日事件以前に行われたオサーマのインタビューのなかで，筆者が現物を確認できたものを第１表に挙げておく（注１）。

オサーマの発言を読むうえで注意しなければならないのは，そのなかにしばしば偽造，捏造されたとおぼしきものが含まれていることである。第１表に挙げたインタビュー中，実際の映像のあるテレビのインタビューはほぼ真正だと断言できるが，それ以外は個別に検証しなければならない。

１，２，４，６はインタビュー場面などの写真が同じ紙面に掲載されているほか，内容からみても本物と考えて間違いない。５に関しては，筆者は紙の媒体でなく，インターネット版を利用している。ここには写真はついていないが，内容的にみて本物と断定できる。

たとえば，ここでは，オサーマの生年がヒジュラ暦1377年，学歴はアブドゥルアジーズ国王大学で経済を学んだと記されている。ところが，この会見公開時点では彼の生年，学歴についてまだ「定説」がなかったのだ。1999年のジャジーラ放送との会見で，当人が『ニダーゥルイスラーム』誌と同じことを語っていることから，同誌の内容が正確だったことがわかる。

11の『ニューズ』紙は，単独インタビューではなく，アフガニスタンのホーストでの記者会見を報じたものである。13の『シャルクルアウサト』のインタビューにも写真はついていないが，BBCの報道（こちらには映像がついている）で，「BBCと『シャルクルアウサト』のインタビューでオサーマが述べた」と報じられていることから，本物とみていい。

2．疑惑のあるインタビュー

9の『フクーク』誌は，ロンドンを拠点とするサウジアラビア反体制派，法的権利擁護委員会CDLRのニューズレターである。同誌によれば，インタビューはもともと『パキスタン・デイリー』という新聞に掲載されたもので，それをアラビア語に訳したのだという。だが，実際には『アウサーフ』というウルドゥー語の新聞がオリジナルで，会見そのものは1997年3月に行われている。このパキスタン両紙については残念ながら現物確認ができず，『フクーク』にも写真が掲載されていないことから，インタビューが本物かどうか判断するのは難しい。後述のように，内容そのものにも若干疑問点があり，信憑性については留保をつけざるをえない。

オサーマのインタビューは通常，事前に質問表を提出させ，それに彼が答える形式をとる。答えに対する再質問はふつう許されない。『フクーク』はその数少ない例外である。ここではわずかではあるが，インタラクティブなやりとりが見られる。インタビュアーはパキスタンのジャーナリスト，ハーミド・ミールである。当時は西側にはほとんど知られていなかったが，9月11日事件後，オサーマ公認の伝記を執筆しているとして突然有名になった人物だ(注2)。彼によれば，このインタビュー後，オサーマからじきじきに伝記を書くよう要請を受けたという。それだけ信頼されていたため，他の欧米メディアとは異なるあつかいを受けたとも考えられるが，真相はわからない。

『フランス・ソワール』はフランスでもっとも有名な夕刊紙のひとつである。このインタビューは1995年にスーダンで行われたのだが，オサーマから発表を控えるよう命令されていたため，1998年8月になって公表されたのだという。発表されたのがケニア・タンザニア米大使館同時爆破テロ直後であることは留意しなければならない。また，このなかでオサーマは「われわれの目的は，誰と同盟しようが，イスラーム革命である」と述べている(注3)。「革命」という語はワッハーブ派ではまず使われない単語である。オサーマがこの言葉を使った事例も皆無といっていい。インタビュー掲載の経緯やフランス国内における同紙に対する評価などを考慮すると，信憑性は低いといわざるをえない。

3の『ローズルユースフ』のインタビューはファーイザ・サァドという女性の手になるものだが，記事中に「（オサーマとの）会見がロ

ンドンで行われた」と書かれている。当時，ロンドンにはオサーマの組織,「忠言と改革委員会」事務所が存在しており，その関係でオサーマがスーダンを出るとき，英国に行くのではないかとの観測もあった。またロンドンに入ったという噂が流れていたことも事実である。だが，確証はない(注4)。さらに記事中で使用されている写真も英国で撮られたものではない。したがってインタビューがほんとうに行われたかどうかは疑わしい。また18の『ラァイルアーンム』の記事も衛星電話でインタビューしたことになっているが，オサーマがこの時期に盗聴されやすい媒体を使うとは考えづらい。

3．テレビへの登場

7は，オサーマのテレビ・デビューである。番組はドキュメンタリーだが，インタビュー場面では，テレビ局側はカメラを回すことを許されず，オサーマが登場する場面として放映されたのは，オサーマ側から渡されたビデオであった(注5)。したがって真の意味でのテレビ・インタビューは次のCNNが最初といえる。このときのインタビュアーは有名なピーター・アーネットであった。

なお14，15は同じインタビュアーによるインタビューが，前者はテレビ，後者は週刊誌という異なる媒体で発表されたものである。16の『ニューズウィーク』は,15の『タイム』と同じ日に発行されているが，インタビュアーは異なる。ニューズウィークのインタビュアーは後述のジャマール・イスマーイール，『タイム』誌はパキスタン人のラヒームッラー・ユースフザイである。ユースフザイは11の記事を書いた記者でもある。

17のジャジーラによるインタビューはもっとも重要なインタビューのひとつといえる。1999年の最初の放送時には，一種のドキュメンタリーとして製作され，オサーマ以外の証言者の発言やニュース・フィルムを重ねて構成されている。しかし，9月11日事件後の再放送時にはオサーマのインタビュー部分のみで再構成され，1999年には放送されなかった発言まで紹介されている。このときのアンカー役はサラーフ・ナジュムというジャーナリストだったが，インタビュアーは，当時ジャジーラ放送にいたパレスチナ人ジャマール・アブドゥッラティーフ・イスマーイール記者である。イスマーイールはもともと『ハヤート』紙の記者としてアフガニスタンやパキスタンにいたアラブ・ムジャーヒディーンを取材しており，1980年代にすでにオサーマと会見しているという。彼は本インタビュー放送後，アブダビ・テレビに移り，さらに9月11日事件後にはオサーマに関する著作を出している。この本のなかで，彼はジャジーラをやめた経緯を詳述するとともに，オサーマとの会見のフルテキストを掲載している。2001年に再放送されたインタビューと比較すると，本のなかには二つほどテレビで放送されなかった質問と答えが含まれている。そのほか，テレビになかった文章が挿入されたり，構成がかわったり，また接続詞の使いかたなど語句に若干の異同がある。こうした変更，修正の結果，趣旨，論旨がかわってしまうようなところはない。本にしか掲載されていない二つの質問が実際に行われたものかどうか検証できないが，活字で出版されている利点から今後はこちらが「定本」となる可能性もあ

第２表　オサーマの声明

	日付	種類	備考
1	1994-1996	忠言と改革委員会声明	
2	1994／12／29	ビン・バーズ宛公開書簡	上記委員会声明か？
3	1996／８／23	対米宣戦布告	
4	1996／８／23-1998／５／29	書簡	ラ・リパブリカ（伊）
5	1998／２／23	イスラーム戦線ファトワー	クドスルアラビー（英）
6	1998／11／18	書簡	ジャング紙（パキスタン）
7	1999／９／17	対インド聖戦声明	ジャング紙（パキスタン）
8	2001／１／10	結婚式	ジャジーラ（カタル）

（出所）　筆者作成。

る[注6]。

Ⅱ　声明など

インタビューではインタビュアーの資質の問題もあり，かならずしもオサーマがその哲学，理念を体系だって論じているわけではない。その意味では，彼自身の著作や声明のほうが分析材料としては重要である。ところが，彼が自分の名前で出版した著作はほとんど知られていない。1993年の『インデペンデント』との会見では，対ソ連聖戦に関する著作があることが示唆されているが，残念ながら確認できなかった。また1999年２月には，バングラデシュ警察が，オサーマの著作,『米国と第３次世界大戦』を無許可で出版したとして７人を告発したという報道があった[注7]。この著作についてもまったく不明である。それに対し声明類は第２表に挙げたものが知られている（2001年９月11日以前）。

１はオサーマがスーダン時代から出しはじめた声明であり，当人によれば，スーダンでは17号まで出している[注8]。「忠言と改革委員会」はオサーマの結成した組織で，もともとは「法的権利に関する忠言と擁護委員会」という名前だったが，1994年６月７日の声明第３号から「忠言と改革委員会」に改称されている。同じ反体制派の法的権利擁護委員会とのバッティングを避けるためであった[注9]。この声明は各号，それぞれのテーマでオサーマがみずからの議論を展開しており，スーダン時代の思想を分析するにはもっとも重要な資料であるが，残念なことに入手しづらく，利用が困難である。筆者も前半の一部しか所有しておらず，未見のものについてはジョージタウン大学のマァムーン・ファンディーの著作などを参考にした[注10]。

３の対米宣戦布告は正式には「聖地を占領する米軍に対する宣戦布告」という。オサーマの米国に対する敵意を明確に表した最重要文書である。オサーマ哲学のエッセンスはこのなかに盛り込まれているといえる。布告原文はアラビア語で書かれているが，筆者はそれを入手することができなかったので，法的権利擁護委員会のムハンマド・マスアリーによる英訳を利用した。

４の書簡は全部で４通あり，2001年10月17日付のイタリアの『ラ・リパブリカ』紙で公開された。書簡の日付はそれぞれ1996年８月23日，1998年４月16日，1998年５月７日，1998年５月29日となっている。これは，ケニア・

タンザニアでの米大使館同時爆破テロの捜査の一環として英国の警察によってロンドンで押収され，トリノでのイスラーム過激派の裁判で証拠物件として英国から取り寄せられたものという(注11)。

5は「ユダヤ人・十字軍に対するジハードのための世界イスラーム戦線」が発出したファトワーであり，無差別テロ宣言として有名になったものである。原文は1998年2月23日付『クドスルアラビー』紙に掲載された。全体が前半・後半にわけられ，後半部分がファトワーになる。ただし，通常のファトワーのように，質問・答えの形式にはなっていない(注12)。

6は，パキスタンの有力ウルドゥー語紙に掲載されたものだが，オサーマがパキスタンの法学者，ジャミール・ハーンに宛てた書簡といわれている。アフガニスタンのターリバーン政権支援は全ムスリムの義務であり，ムスリムはエルサレム解放まで闘争を継続しなければならないということを内容とする。7はインドに対する聖戦を呼びかける声明で，そのなかでオサーマは「われわれの最大の敵は米国とインドである。われわれは最大限の努力を傾注し，彼らを標的にしなければならない」と述べている(注13)。ただし，筆者は6と7については現物を確認していないので，真偽を論ずることはできない。

最後の8は，2001年1月のオサーマの息子とオサーマの側近の1人，ムハンマド・アーテフの娘との結婚式での発言である。ここでオサーマは，エルサレムのイスラエルによる占領を嘆く詩を朗詠している(注14)。

これら以外で筆者が把握しているものとしては，オンラインで公開されていた，撮影日時・場所とも不明のビデオがある。発言内容からイードのときの説教ということはわかるが，映像・音声ともに不鮮明でほとんど聞き取れない。かろうじて預言者ムハンマドの教友，ハムザ・ビン・アブドゥルムッタリブに関する説教ということは理解できる。基本的には殉教を賞揚する説教であることは間違いない(注15)。

もうひとついわゆるリクルート・ビデオというものがある(注16)。このビデオは2001年6月に存在が明らかになった。最初に報じたのはクウェートの新聞である(注17)。カーイダのクウェート人スポークスマン，スレイマーン・アブーゲイスがちょうどこのころクウェートを離れ，アフガニスタンに向かっている。何か関係があるのであろうか。なおこのビデオについては最近，詳細な分析が行われたうえ，オンラインで公開されるようになった(注18)。ハムザ・ビン・アブドゥルムッタリブのビデオが単なるホームビデオにすぎないのに対し，こちらはタイトル，テロップ，音楽が挿入された「作品」に仕上がっている。

Ⅲ　事件後の声明など

1．真偽の検討

9月11日事件直後から，米当局者や新聞・テレビなどからはオサーマが主犯であるとの発言が現れた。しかし，パキスタンの『アウサーフ』紙は翌12日，オサーマから送られたとするメッセージを掲載，オサーマが犯行を否定したと報じた。オサーマの発言と伝えられるもののなかでは，これが事件後最初であ

第３表　９月11日以降のオサーマのインタビュー・声明

	日付	種類	媒体
1	2001／９／12	書簡声明	アウサーフ（パキスタン）
2	2001／９／16	プレス声明	アフガニスタン・イスラーム通信等
3	2001／９／24	書簡声明	ジャジーラ（カタル）
4	2001／９／28	インタビュー	ウンマ（パキスタン）
5	2001／10／７	ビデオ声明	ジャジーラ
6	2001／11／１	書簡声明	ジャジーラ・BBC（英）等
7	2001／11／３	ビデオ声明	ジャジーラ
8	2001／11／10	インタビュー	ドーン・アウサーフ（パキスタン）
9	2001／12／13	ホームビデオ	アメリカ国防総省
10	2001／12／27	ビデオ声明	ジャジーラ
11	2001／１／31	インタビュー	CNN（ジャジーラ）

（出所）　筆者作成。

ろう。その後，2002年１月30日までに報じられたオサーマのインタビュー・声明類には第３表のようなものがある。

１の声明は，西側やアラブのメディアではあまり取り上げられておらず，筆者も現物を確認していない。だが，日本の共同通信によると，この声明のなかでオサーマは，事件への関与を否定するとともに,「私にはパレスチナ人をイスラエルの抑圧から解放する使命がある。パレスチナ人は米国がイスラエルに供給したミサイルや戦闘機による爆撃で苦しめられている」と述べたという[注19]。

この記事を書いたのは前述のハーミド・ミールであった。彼によれば，事件後，メッセンジャーがアフガニスタンから書簡を届けにくるとの電話があり，深夜にその書簡を受け取ったという。彼は，そのメッセンジャーをオサーマの周辺で見たことがあり，したがって書簡も本物であると述べている[注20]。原文を見ていないので，真偽を即断することはできないが,「パレスチナ人をイスラエルの抑圧から解放する」云々という共同通信の引用文が直訳であるとするならば，この言い回しはオサーマらしくない。なぜなら，彼は「イスラエル」という単語を使うことは少ないからだ。イスラエルに言及する場合，オサーマは通常，ユダヤ人，シオニストという言葉を使う[注21]。

２は複数の報道機関にファックスで送られた声明である（パキスタンにあるアフガニスタン・イスラーム通信によれば，オサーマ側近のアブドゥッサマドという人物から送られたという）。このなかでも，オサーマは自分が事件とは無関係であると主張しているが，このプレス声明なるものが本物かどうかはきわめて怪しい。プレス声明の最後に「シェイフ・オサーマ・ビン・ラーデン」との署名があるが，オサーマは公式の署名にはこれまでかならず「オサーマ・ビン・ムハンマド・ビン・ラーデン」という名前を使っており,「オサーマ・ビン・ラーデン」という簡略化された名前を使うことはないからである[注22]。声明は捏造の可能性が高い。

一方，３と６は書面形式で，カタルのジャジーラ放送などに送りつけられたことになっている。こちらは署名が「オサーマ・ビン・

ムハンマド・ビン・ラーデン」となっており，その意味では２よりは信憑性が高い。３，６ともにオンラインで実物の声明の画像が公開されており，そこではオサーマの直筆署名を見ることができる。「直筆署名」の真偽はわからない。だが，両声明に書かれた署名は同じもののように見える。内容はともにパキスタンの米国支援を非難し，パキスタンのムスリムに対し武器をとって戦うよう呼びかけるものである。

３は９月23日付で，ジャジーラ放送のカーブル支局に宛ててファックスで送られたものとされている（実際に送られたのは24日）。CNNによれば，ジャジーラ当局者は，これまでのオサーマからの連絡法からみてこの声明が本物であると述べているという[注23]。一方，６に関しては11月１日にジャジーラのカーブル支局にファックスではなく現物の声明が届けられたようだ。ジャジーラは，この声明についている署名が過去数年のあいだにオサーマから送られてきた署名と同じであるとし，したがって声明は本物であると主張している。

ところが同じ声明が，英国のBBCにもファックスで送付されている。BBCによれば，まず同局のアラビア語放送部門にアフガンあるいはパキスタン訛りのアラビア語を話す男から電話があり，それからファックスが送られたという[注24]。男は英国外から電話していると主張していたが，BBC側が調査したところ，電話はロンドン市内からであった。

さて，これらの事実をどう解釈すべきだろうか。３と６は同一人物の手によるものであろうか。そしてその人物はオサーマなのであろうか。６の声明は，ジャジーラのカーブル支局には現物が送られ，ロンドンのBBCにはファックスで送付された。現物がカーブル支局に送られたというジャジーラの主張が正しいのなら，オリジナルがアフガニスタンでつくられたことは間違いないだろう。完成した声明はカーブルには現物が送られ，ロンドンにはファックスで送られたことになる。しかし，BBCにはロンドン市内から送られている。アフガニスタンからいったん英国在住の，アフガンあるいはパキスタン訛りのアラビア語を話すオサーマの支援者のもとにファックスが送られ，そこから間接的にBBCに転送されたということであろうか。

２．バスマラ問題

３，６の声明には形式上の疑問点もある。二つの声明はともに「慈悲深く慈愛遍きアッラーの御名によりて」というイスラームの常套句からはじまる。アラビア語でバスマラと呼ばれる，この常套句は，ほとんどすべてのアラビア語の著作の冒頭につけられている。ムスリムは何か重要な行為を行おうとするとき，アッラーの祝福を得るため，バスマラを唱える。したがって，著作冒頭にこの句が置かれるのは当然である。ところがこの二つの声明についてはかならずしもそれがあてはまらない。前述のとおり，両声明とも，パキスタンのムスリムに対し武器をとるよう呼びかけていた。つまり聖戦を主張していたわけだ。ところが，聖戦に関する文書にはバスマラをつけないほうがふつうなのである[注25]。実際，オサーマの過去の声明を見てみると，対米宣戦布告も無差別テロ宣言もともに冒頭はバスマラでなく「讃えあれ，アッラー」ではじまっている。同様に，９月11日事件後に発表さ

れたビデオ声明も「讃えあれ，アッラー」が冒頭にくる。オサーマの側近，アイマン・ザワーヒリーやアブーゲイスによる聖戦を呼びかける声明にもバスマラはついていない。

外面を重視するイスラーム主義者がこうした形式的な点を蔑ろにするとは考えづらいことから，この２声明は，イスラームに関する理解，知識がオサーマらと異なる（あるいは劣る）人物によって書かれた可能性が高い。ちなみにハイジャック犯の１人，ムハンマド・アターの荷物から発見されたとされる５ページのアラビア語「指令書」の冒頭には「慈悲深く慈愛遍きアッラーの御名によりて」が書かれている[注26]。

３．インタビューの疑問点

ビデオ声明は本人が登場しているので信憑性は疑いようがない。だが，問題なのは４と８のインタビューである。４の『ウンマ』紙のインタビューは，本来なら事件後最初のオサーマとのインタビューだったはずだが，なぜか西側，アラブのほとんどすべてのメディアで黙殺された。『ウンマ』紙はカラチで発行されているイスラーム系ウルドゥー語新聞である。とくにアフガニスタンのジハードとは密接な関係をもっているといわれる。インタビューの日時は記載されておらず，インタビュアーは特派員となっている。オサーマはここで９月11日事件への関与を否定し，犯人がユダヤあるいは米国のスパイであることを示唆する。インタビュアーが最初に，事件への関与について尋ね，それに対しオサーマはまずバスマラを唱えている。この場合は聖戦を呼びかけているわけではないので，バスマラを唱えることは不自然ではないのだが，オサーマはこれまでインタビュー冒頭にバスマラを唱えたことはなく，きわめて異例といえる。その後，アッラーを称える句がつづき，ついでオサーマは「人びとにわたしの観点をつたえる機会を与えてくれたウンマ出版グループに感謝する」と述べる[注27]。オサーマがこれまでインタビューを掲載する機関にこのような殊勝なことをいったためしはない。したがって，このインタビューは形式面だけでもきわめて疑わしいことがわかる。

一方，８のインタビューは11月10日付のパキスタンの『ドーン』紙（英語）および『アウサーフ』紙（ウルドゥー語）に掲載されたものである。インタビュアーはともにハーミド・ミールだ。インタビュー内容は非常に興味深い。

９月11日事件についてオサーマは犯行を認めていないが，否定もしていない。これはいつものパターンである。重要なのは「もしアメリカがわれわれに対し核兵器あるいは化学兵器を使用したら，われわれも化学兵器・核兵器を使用する」と述べ，「われわれは抑止力として（核・化学）兵器を所有している」と断言したことだ。オサーマはこれまで大量破壊兵器の入手はムスリムの義務であると繰り返し指摘していたが，実際に所有していると明言したのはこれが初めてである。ただし，実際に所有しているかどうかは検証できない。

またミールは「（ターリバーン政権最高指導者）ムッラー・オマルの娘と結婚していたり，あなたの娘がムッラー・オマルと結婚しているというのは事実か」と尋ねている。オサーマはこれに「わたしの妻は全員アラブ人であり，（わたしの娘もみなアラブ人ムジャーヒディ

ーンと結婚している)」と答えている。この説は，従来オサーマとオマルの密接な関係を説明するときに，しばしば持ち出されてきた根拠であった。オサーマはみずからそれを否定したのである。

このように内容は興味深いのだが，その一方で疑問点も少なくない。検証してみよう。『ドーン』紙によると，ミールは11月７日夜にカーブルからジープで目隠しをされてどこか非常に寒いところに連れていかれた。遠くに対空砲火の音も聞こえたらしい[注28]。一方，11日付『アウサーフ』紙では，カーブルから車で５時間の場所で８日にインタビューが行われたとなっている[注29]。同じ11日付英『サンデイ・テレグラフ』紙はミールとのインタビューを掲載し，彼とオサーマとの会見の模様を詳述している。それによれば，ミールのところに５日，かつてオサーマとともにいた人物の親戚から電話があった。これをきっかけに，ミールはイスラーマーバードを出立，ジャラーラーバードに入る。そこでオサーマがカーブルで会見を行うかもしれないという情報を得たため，すぐにカーブルにいき，小さなゲストハウスで待機していたところ，7日夜に４人のアラブ人がやってきて，５時間半かけてランドクルーザーでオサーマのもとに連れていかれたという[注30]。

疑問の第１点は，この激しい戦闘のなか険しい道のりとはいえ，５時間も誰にも攻撃されず，誰にも捕まらずに，オサーマのもとにたどりつけたという点である。この疑問に関しては11月11日にパキスタン外務省報道官も指摘している[注31]。

第２点は，『ドーン』紙と『アウサーフ』紙のあいだの内容が異るということである。インタビューは同じ日の両紙に掲載されたのだが，『アウサーフ』紙には核兵器に関する言及がなかった。ただし，翌日の『アウサーフ』紙には，インタビュー第２部として核兵器の話が言及されている。ところが，この第２部には『ドーン』紙に書かれていないことまで含まれている。

また，インタビュー冒頭，ミールは10月７日のジャジーラでのビデオ声明に言及して，オサーマの事件への関与について尋ねている。疑問の第３点は，なぜジャジーラを引用したのかということである。これは裏返すと，なぜ，自分が所属する『アウサーフ』紙が９月12日に掲載し，ミール自身が本物であると断言したオサーマの声明（事件への関与を否定している）を引用しなかったのかということになる。

４番目の疑問は，オサーマの発言にある。ミールが「イスラームの教義に照らして無辜の民を殺害することが正当化できるのか」と訊くと，オサーマは「敵がムスリムの領土を占領し，一般人を人間の盾として使った場合，敵を攻撃することは許される。たとえば，強盗が家に押し入り，子どもを人質にとったとする。そのとき，子どもの父親は強盗を攻撃することができる。たとえその攻撃で子どもが傷つこうと」と答えている。オサーマは実は，この「強盗が家に押し入り」という比喩を４年前の1997年にも用いている。しかもそれはミールが行ったインタビューなのである。このときは，オサーマがミールに「家に強盗が入ったらどうする」と質問し，ミールが「武器をもっていれば，攻撃する」と答えている[注32]。この奇妙な符合が何を意味するのかはっきりとはわからない。オサーマが前のイ

ンタビューを覚えていて，そのときに使った比喩をまた持ち出したとも考えられる。

以上のような疑問点だけから，このインタビューが捏造であるとの結論を導き出すのは短絡であろう。だが，現時点では，このインタビューは本物であると断定するだけの勇気は筆者にはない。インタビューをいつかどこかで行ったかもしれないが，それが９月11日以降であるかどうかは留保をつけざるをえないのである。

Ⅳ　10月７日のビデオ声明

このように考えてくると，９月11日事件以降にメディアで紹介されたオサーマの声明類は，実際に本人が登場するビデオ声明を除けば，ことごとく信憑性の点で問題があることになる。そこで，今度は10月７日と11月３日に発表された，二つのビデオ声明を見ながら，オサーマの言説を細かく分析してみよう。

10月７日は米軍のアフガニスタン空爆がはじまった日である。それにあわせるかのように，ジャジーラ放送がこのビデオを放映した。だが，ビデオがいつ撮影されたかは不明である。太陽光線のもとで撮影されているので，空爆開始以前に撮られていたものと思われる。ビデオはまず，ブーゲイスの発言からはじまり，ついでザワーヒリーがスピーチを行う。オサーマの登場はそのあとである。

冒頭は前述のとおり，バスマラではなく，「讃えあれ，アッラー」の句からはじまる。のっけから聖戦を暗示しているといっていい。以下，イスラームの常套句がつづき，「至高至大のアッラーは米国をそのもっとも脆弱な場所において攻撃し，その最大の建築物を破壊し給うた」と述べ，今回の事件が米国に対するアッラーの罰であると主張する。注目すべきはその次である。

「米国が今，味わっているのは，われわれが何十年にもわたって味わってきたものと比べれば，取るに足らないものだ。われら共同体はこの屈辱と侮辱を約80年，味わってきたのである。」

ここで言及される80年とは，すでに拙著で指摘したように，1922年９月11日，すなわち英国によるパレスチナ委任統治発効の日からの80年を指すと推定される(注33)。犯行日が９月11日であったことは，犯人たちが米中枢への攻撃とパレスチナ問題を結びつけて考えていたこと意味する。オサーマたち（あるいは犯人たち）の運動とパレスチナ問題のリンケージ自体，常識的にみれば，また2000年から断続するパレスチナのインティファーダを念頭におけば，自然なことである。また，域内の枠組みからみても，湾岸危機・戦争時のイラクのサッダーム・フセインの言説にも明らかなように，パレスチナ問題は，中東の人たちの問題意識においてつねに中核的位置を占めていた。だが，こうしたパレスチナ問題の捉えかたを，オサーマ的イスラームの枠組みで考えると，そのなかに大きな転換があったことがわかる。なぜならオサーマの言説においては，パレスチナ問題はつねに二義的な役割しか与えられてこなかったからだ。では何が一義的だったかといえば，むろん米軍のサウジアラビア（＝聖地）駐留である(注34)。

筆者は拙著のなかで，オサーマの言説のなかで徐々にパレスチナ問題の比重が大きくなり，それに反比例して彼の思想の中核ともい

うべき二聖地問題が縮小していく過程を分析した。2001年６月に存在が明らかになったリクルート・ビデオでは，依然として米軍（＝十字軍）によるマッカ，マディーナの二聖地占領が最初にきており，他の問題以上の重要性が賦与されていた。ビデオが製作された時期は正確にはわからないが，ビデオのなかでオサーマは米国のクリントン大統領に言及するとともに，「国防総省，国務省など（米国）現政権の主要官庁をユダヤ人が握っている」と述べていることから，ブッシュ現大統領就任以前につくられたと推測される。また2000年９月にイスラエル軍に殺害されたパレスチナの少年，ムハンマド・ドゥッラとその父の映像が挿入されていることから，それ以降，つまり2000年後半の製作と推定できる。このリクルート・ビデオから2001年10月のビデオ声明までのあいだに，オサーマは分析するに足るだけの充分な長さをもつ発言を行っていない。したがって，2000年後半から2001年９月11日のあいだの約１年間に大きな思想上の，あるいは戦術上の交点が位置するとも推測される。2001年１月，自分の息子の結婚式で，オサーマがエルサレム占領に関する詩を朗詠したとされている。これだけをもってその方向転換の証拠とするのは無謀だが，ひとつの目安にはなるかもしれない。

オサーマはまた次のようにも述べている。

「その（イスラーム共同体の）子どもたちは殺され，その血が流され，その聖地は蹂躙され，しかもアッラーの下し給うたこと以外で殺されている。しかし，聞くものもおらず，答えるものもない。至高至大のアッラーが，イスラームの部隊，イスラームの前衛を成功させ，米国を壊滅的に破壊することをお許しになられたとき，わたしは，彼らの地位が高められ，いと高き楽園に召されるよう，アッラーにお願いもうす。」

ここではイスラーム世界の現状認識が語られ，事件がその結果であると示唆されている。オサーマによれば，イスラーム共同体（umma）は攻撃を受け，破壊されつつあり，こうした現状を打破するために今回の事件があったのだという。ここでいう「イスラームの部隊，イスラームの前衛」こそが９月11日事件の実行犯となるわけだが，もちろん，この声明のなかではオサーマは彼らとの直接のつながりについて言及を避けている。ちなみに，このあたりのオサーマのアラビア語は非常に古風で，装飾的な言い回しを多用しており，日本語ではその微妙なニュアンスを伝えるのは困難であるが，オサーマと同じような思考パターンをもった人たちには単なる字面以上のより鮮烈なインパクトを与えるにちがいない。

オサーマはこののち，ムスリムが世界各地で抑圧，殺害されている現状を，９月11日事件での犠牲者や米国の日本に対する核兵器の使用などと比較する。オサーマによると，米国にとって米国やその同盟国が行った殺害は犯罪ではなく，「異論のある問題」（mas'ala fīhā naẓar）にすぎない。それなのに，なぜムスリムが行った抵抗運動はテロリズムとして弾劾されるのか。このような理不尽な言辞を弄するのは偽善以外の何ものでもなく，品性下劣な虚偽の擁護者であり，無辜の子どもらに対する抑圧者である。米国およびその支持者らは現代のフバルにほかならない。フバルとは無明時代の偶像のひとつであり，こうした偶像はオサーマ的枠組みにおいては不信仰，反

イスラームの象徴であり，その頭目が米国，なかんずくジョージ・W・ブッシュ大統領なのである。

「こうしたさまざまな出来事は世界を（中略）信仰の世界と不信仰の世界に分断した。すべてのムスリムはその宗教を勝利に導かねばならない。すでに信仰の風が吹きはじめ，変化の嵐が到来し，預言者ムハンマドの半島から虚偽 bāṭil を取り除こうとしている。」

信仰の世界と不信仰の世界，イスラーム世界と非イスラーム世界，敵と味方，自分たちとそれ以外のものたち。このような単純な二元論は本来オサーマの思想のもっとも顕著な特徴であった。この部分ではそれがより明確に，より強く宣言されている。これは,「対テロ戦争を支持するか，さもなくば」というブッシュ大統領のテキサス流恫喝と何らかわるものではない。最後にオサーマは米国および米国民に警告する。

「われわれ（オサーマたちムスリム）が現実にパレスチナに住み，ムハンマドの地からすべての不信仰の軍隊が出ていくまでは，米国もそこに住むものたちもけっして安全を享受することはできない。アッラーは偉大なり，イスラームに栄光あれ。」

暴走しはじめたオサーマの怒りの始源はそもそも湾岸危機時の米軍のサウジアラビア駐留にあったはずだ。米軍駐留への反対が反米そのものへと結晶化し，結果的に制御不能なまでに行動を過激化させていく。そのあげく，オサーマは国籍を剥奪され，一族から勘当され，ついにはアフガニスタンの山中に隠れ住むようになる。諸悪の根源である米軍をサウジアラビアから撤退させることこそが全ムスリムにとっての，オサーマが考えるところの，最優先課題だったはずだ。ところがその究極の目的が，10月７日の声明においては，声明の最後にまで押しやられてしまったのである。

Ⅴ　11月３日のビデオ声明

11月３日のビデオ声明もやはりジャジーラのカーブル支局に届けられた。撮影日時は不明である。この声明も10月のビデオ声明と同様,「讃えあれ，アッラー」の句ではじまる。11月３日声明では，お得意の二元論が早くも冒頭で登場する。９月11日事件で「人びとは二つの部分（qismayn）にわかれた。ひとつは米国の専制（jabarūt）に対する攻撃を支持するもの，もうひとつはそれを非難するものである」と。オサーマの二元論を図式化すると第１図のようになる。

オサーマは９月11日後，世界が二つに分割され，しかもそれが宗教的に二分されるとする。それゆえ，彼はこの戦いが宗教戦争（ḥarb dīnīya）であると規定する。彼にとっては，この明白な事実を隠蔽しようとするのは欺瞞にほかならない。欧米や日本では，この戦いを文明間の衝突にしてはならない，宗教戦争にしてはならないという議論があり，それゆえ十字軍という言葉の使用もタブー化していったが，オサーマはあえてこの戦いを文明間の戦争，宗教戦争へと，すなわち自分の土俵へと引きずりこもうとしている。彼によれば，この宗教戦争は，すでにコーランやハディースのなかに明示されており，イスラームの信仰に根ざしたものなのである。

「われわれはいかなることがあれ，われわ

れと不信仰者（kuffār）のあいだの対立を忘れてはならないし，その対立は信仰上のもの（‘aqā’ idī）なのである。」

オサーマにとっては，ムスリムとそれ以外のものたちの対立，敵意（‘adā’）はコーランやハディースにも述べられているように，神の意志にほかならない。それゆえ，妥協はありえないし，和解もありえない。ムスリムが異教徒，不信仰者を攻撃するのは宗教上の義務なのである。その論拠としてここではコーランの雌牛の章第120節が引用されている。

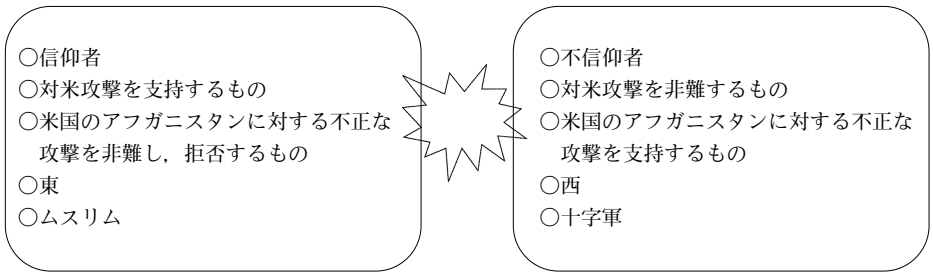
「ユダヤ教徒も，キリスト教徒も，お前が彼らの宗教を信奉しないかぎり絶対に満足しないであろう。」(注35)

オサーマによれば，現在，イスラーム世界は十字軍からの未曾有の攻撃にさらされている。この攻撃は預言者ムハンマドに啓示が下されて以来，もっとも残虐で，もっとも深刻で，もっとも激しいものである。そして，イスラーム世界の各地では，オサーマのためにではなく，みずからの宗教に突き動かされて，その攻撃に反対するものたちが現れている。そこで，彼は，ムスリムたちに究極の問いを突きつける。この戦争でどちらにつくのだと。

ブッシュ大統領が思わず「十字軍」という単語を使い，あとで訂正するという失態があったが，オサーマから見れば，これは失態でもなんでもなく，単に十字軍側の本音が漏れてしまっただけにすぎない。ブッシュは十字架をもち，その御旗を高く掲げ，戦いの先頭に立っているのだ。イスラーム共同体は何十年にもわたって迫害を受けてきた。これがテロでなくて何であろう。ところが，殺害された無辜の子どもたちのための報復がはじまると，ウラマーや偽善者たちはこのあからさまな冒瀆を擁護しようとしさえする。この戦いでブッシュの側につこうとするものは，イスラームを冒瀆する十の大罪のひとつ，すなわち不信仰者と仲間になるという大罪を犯していることになるだろう。

ここでオサーマは歴史のおさらいを行う。オサーマによると，第一次世界大戦後の列強による中東地域の分割，ロシアによるチェチェンへの攻撃はキリスト教徒によるムスリムに対する攻撃である。ボスニア，カシミールでは，国連は座視したままで，何もしていない。国連は1947年にパレスチナ分割決議を出し，ムスリムの土地をユダヤ人に引き渡してしまった。アラブの指導者と自称するものたちは国連に訴えつづけているが，これは預言

第１図　オサーマの二元論



（出所）　筆者作成。

者ムハンマドに啓示されたものを否認することにほかならない。国際的なレジテマシーを云々するものたちはコーランと預言者の伝承のレジテマシーを否認することにほかならない。ムスリムは国連のような犯罪の道具に頼ってはならないのである。

東ティモールの場合，オサーマは次のように考える。国連が，世界最大のムスリム人口を擁するインドネシア政府に最後通牒を突きつけ，強制的に東ティモールを分割させ，十字軍である豪州軍が東ティモール分割のため，インドネシアに上陸した。ここでは，東ティモールが，ムスリム主体のインドネシア政府によって迫害され，独立を求めていたキリスト教徒の地域であるという常識的な構図がすっぽりと抜け落ちている。オサーマにとっては，東ティモールはあくまでイスラーム世界の一部なのである。

ソマリアや南スーダンでも状況はかわらない。また，とりわけパレスチナやイラクの現状は悲惨きわまりなく，オサーマは，文字どおり筆舌に尽くしがたいと嘆じている。

これらの戦いは，オサーマによれば，それぞれが無関係な，個別の戦いではない。「激烈で残虐で醜悪な十字軍戦争」(al-ḥarb al-ṣulaybīya al-shadīda al-sharisa al-shan'ā') の巨大な連環の一部なのである。

またオサーマは，米国とイスラエルを別ものと考えるのも間違いであると説く。これは，イスラエルがパレスチナを抑圧していることで，米国を攻撃対象にするのは筋違いであるという批判に答えたものであろう。イスラエルは米国によって支援され，米国製の武器でパレスチナ人を虐殺しており，両者はまさに一心同体，それを別個と主張するのはイスラーム共同体の敵にほかならず，アッラーとその使徒を裏切る行為にほかならないのである。

この11月３日声明では，オサーマがあれほど固執し，固執したがゆえに批判されもした米軍のサウジアラビア駐留問題はまったく，ただの一言も触れられていない。この問題が10月７日声明では声明の最後に押しやられたと述べたが，約１カ月後の声明ではついに声明そのものから滑落してしまったのだ。

声明の最後，オサーマは，「ムスリムたちよ，アッラーを畏れよ。あなたがたの宗教の勝利に向け突き進め」とムスリムたちに訴えかける。ワッハーブ派の徒らしく，いつも冷静で淡々と語る彼にしては珍しく，声が上ずっている。

「イスラームはあなたがたを呼んでいる。おお，イスラームよ。おお，イスラームよ，おお，イスラームよ。」

「おお，イスラームよ」の部分はアラビア語では「ワー・イスラーマーフ」(wā islāmāh) という言葉が使われている。古典的で非常に凝った言い回しだ。現代アラビア語の日常会話ではまず使うことのない用法だが，同時にアラブ人であれば知らないものはないというぐらい有名な言葉でもある。1260年，パレスチナで世界史的に重要な戦いが起きた。その地名をとってこれをアイン・ジャールートの戦いという。この戦いでエジプトを支配するマムルーク朝スルターン，クトゥズは当時破竹の勢いで進撃してきたモンゴル軍と激突した。はじめはモンゴル軍が優勢で，モンゴル軍の右翼がマムルーク軍左翼を押しはじめたため，マムルーク軍は徐々に後退を余儀なくされる。そこにクトゥズが颯爽と登場，岩のうえに登り，兜を脱ぎ捨てるや「ワー・イス

ラーマーフ」すなわち「おお，イスラームよ」と叫び，マムルーク軍を鼓舞したのである。味方の将の，この勇猛な叫びが奏功したのか，その後マムルーク軍はモンゴル軍を押し返し，ついにはそれを打ち破る。この戦いは，クトゥズらマムルーク朝側から見れば，その叫びにあざやかに象徴されるとおり，異教徒たるモンゴル軍からイスラームを守るための戦い，すなわち聖戦であった。少なくとも後世のイスラームの歴史家たちは――そして現代のアラブ人，ムスリムたちも――そう考えた。この逸話に語られた，すべてが歴史的な事実かどうかは問題ではない。だが，アラブ世界ではこの逸話が今でも小説，映画，テレビなどで反復して語り継がれている。オサーマが「ワー・イスラーマーフ」と叫ぶとき，アイン・ジャールートの戦いを想起していたことは間違いない。米軍による空爆によりターリバーンやカーイダが瓦解していくなか，オサーマは，そしてその周辺にいるものたちは，この叫びをきっかけに，かつてのマムルーク軍のように，ムスリムたちが決起し，逆襲をはじめ，現代のモンゴル軍である米軍を撃破することを期待していたのだろう(注36)。

Ⅵ　その後のビデオ
――あるいは詠うテロリスト――

二つのビデオ声明，またパキスタンの『ドーン』と『アウサーフ』によるインタビューののちにも，オサーマのビデオとされるものがいくつか報じられている。2001年11月11日付英『サンデイ・テレグラフ』紙は，オサーマの未公開ビデオを入手したと報じた(注37)。同紙によると，オサーマはそのビデオのなかで，９月11日の同時テロの犯行を認めているという。オサーマは「世界貿易センタービルは合法的な標的である。ビルは米国の経済力を支援している。これらの事件はあらゆる意味で偉大なことだ。破壊されたのは単なる建物ではなく，米国の士気の建物である。(中略)(ハイジャッカーたちは）アメリカの経済的，軍事的ランドマークを破壊したことでアッラーの祝福を受ける」と述べるとともに，「もし，われわれの仲間を殺害する報復がテロリズムであるとするなら，われわれがテロリストかどうか歴史に証人になってもらおう。そのとおり，われわれは，彼らの無辜の民を殺す。これは宗教的にも論理的にも合法である」と語っている。「歴史に証人になってもらう」という言いかたはすでに1999年１月の『タイム』誌およびABCとのインタビューでも見られる。また『サンデイ・テレグラフ』は，オサーマが「テロには善いテロと悪いテロがあり，われわれは善いテロを行っている」と述べたと報じているが，これも1996年の『クドスルアラビー』紙との会見にある「賞讃されるべきテロと非難されるべきテロ」という言いかたと同工異曲であろう。なお『サンデイ・テレグラフ』はビデオのなかでオサーマが豪州，独，日本に対し紛争に手を出すなと警告していることも紹介している。このビデオは，同紙によれば，カーイダ支持者のあいだに出回っているという。

一方，英国政府は11月14日にこのビデオでのオサーマの発言をオサーマが９月11日の事件に関与していたことを示す新たな証拠として議会に提出した(注39)。また11月30日付の英『シャルクルアウサト』紙は，このビデオが10

月20日に撮影されたもので，何らかのかたちでカタルのジャジーラ放送がかかわっているが，放映はされなかったと報じた。同紙によれば，ジャジーラ側は，ビデオの存在そのものを否定しているという[注39]。ただし，ジャジーラは12月になってから，同局が未放映のオサーマ・ビデオをいくつか所有しており，そのなかには，『サンデイ・テレグラフ』および英国政府のいうビデオも含まれていることを認め，編集あるいは技術的な理由で放映を控えていたと主張した[注40]。

そして12月13日には米国が決定的な証拠となるビデオを公表する。ビデオは米軍がカンダハールで入手したとされるが，撮影日時など詳細は不明である。ホームビデオで撮影されたようで，画質・音質ともにかなり悪い。アラビア語の聞き取りは筆者にはほとんど困難であった。13日の公開時には米政府による英語の字幕が付されていたが，これはかなりの意訳であり，分析のテキストとしては適当ではない[注41]。幸いアラビア語のトランスクリプトも公開されており，今後はこちらが定本になるだろう[注42]。ちなみにオサーマが事件に関与している証拠となるのは以下の部分とされる。

⑴　ニューヨークの世界貿易センタービルでの死傷者の数をあらかじめ計算していた。

⑵　事件が起きる日をあらかじめ知っていた。

⑶　ムハンマド・アターが作戦を統括していたことを指摘している。

このビデオが決定的な証拠となるにしろ，問題点がないわけではない。米軍がアフガニスタン攻撃を開始したのはビデオ発見以前のことである。このビデオが決定的な証拠であるとするなら，米軍が攻撃を開始した時点での，オサーマを犯人とする根拠は何だったのか。この不鮮明なビデオ以下の証拠しかなく，アフガニスタンを攻撃したのだとすれば，結果的にオサーマが真犯人であったとしても，見切り発車との非難はまぬがれないだろう。

一方，オサーマらとともにビデオに登場する客人の身元についてもさまざまな説が流されたが，サウジ人であることは間違いないようである[注43]。いずれにせよ，９月11日事件以降も，サウジ人（しかも身体の不自由な）がアフガニスタンまでやってきて，オサーマと会見していたというのはある意味驚きであるし，彼が言及したサウジ人宗教者たちがサウジ国内でオサーマ支持の説教を行っていたということも興味深い。サウジアラビアにおけるオサーマ人気をはからずも証明する結果となった[注44]。

もうひとつ，オサーマの言葉自体にも触れておかねばならない。これまでのビデオ声明やインタビューでは，オサーマはつねに正則アラビア語（フスハー）で話をしていた。ところが，このビデオでは一転して口語中心となっている。おそらくかなりプライベートな雰囲気での会話だったのだろう。このビデオがもともと一般公開を目的に撮影されたものではないことがわかる。私見ではあるが，中心に映っているのが客人であることを考慮すると，ビデオが，オサーマでなく，この客人を映すことを目的にしているとも考えられる。あるいはこの客人のための土産のようなものであろうか。

一般向けでない私的な会話ということが影響しているのだろう。オサーマはビデオのな

かで，今回の作戦に関する裏話，カーイダの組織・イデオロギー面にまで触れている。たとえばアブーゲイスは９月11日の作戦についてテレビを見てはじめて知ったとビデオのなかで紹介されている。９月11日の作戦がカーイダ上層部ですら何も知らされていなかったことは，この組織がきちんと秘密を守ることのできるしっかりとしたシステムをもっていることを意味する。しかも驚くべきは，実行犯にすら，作戦の詳細が伝えられておらず，飛行機に搭乗するときにはじめて，それを知らされたということである。知らせる役目はおそらく実行犯各グループの責任者の仕事であろう。作戦の統括役とおぼしきムハンマド・アターのいわゆる「指令書」もこうしたことを踏まえて再読する必要があるかもしれない。

また，オサーマは実行犯について「彼らには今日の常識的な意味での知識（‘ilm）やフィクフがない。だが，彼らにはムハンマド――彼のうえに祈りと平安があらんことを――がもたらした意味でのフィクフがある」と述べている。この言葉が正確に何を意味しているのか筆者には理解できない。実行犯たちが，通常のイスラームの常識，あるいは法律（フィクフ）にとらわれないということを指しているのだろうか。おそらく彼らにとっては常識的な意味でのフィクフと預言者ムハンマドがもたらしたフィクフは異なるものなのであろう。そして，オサーマ的には後者のほうを優先すべきだったにちがいない。彼らの目的を達成するためには，通常のイスラームの戒律を遵守する必要はなく，より重要なムハンマドの法を守るべきだというのである。彼らの理解では，「ムハンマドのもたらしたフィクフ」は，報復として数千人の無辜の民を殺害することを容認するのであろうか[注45]。

さらに周辺的な部分としては，ビデオ内でテレビやサッカーについて言及されていることが面白い。オサーマらアラブ・ムジャーヒディーンは，ターリバーン政権の客人としてアフガニスタンにいながら，ターリバーンが禁止していたテレビでサッカー中継を楽しんでいたわけだ。

なお会話は口語中心だが，最後の詩は，韻律をきちんと踏まえた，きれいなフスハーで詠まれている。

2001年12月27日，ジャジーラ放送は，未発表のオサーマのビデオ声明を放映する。すでにこの時点では米軍などによるアフガニスタン攻撃が本格化しており，オサーマの行方や生存に関してもいろいろな説が流布しはじめていた。このビデオ冒頭でオサーマは「世界の不信仰者，不信仰者の頭目，アメリカに対する祝福された攻撃から３カ月後，イスラームに対する十字軍の凶悪な戦い後約２カ月」と述べている。この言葉を信じるなら，12月初めまではオサーマは生存していたことになる[注46]。なおこの声明の最後には12月13日のビデオで詠まれたのと同じ詩が若干字句を変更したうえで挿入されている。

本稿執筆時点（2002年３月）でオサーマのものと完全に確認できるのはこの12月27日の声明が最後である。こののち2002年１月31日には，CNN がジャジーラの抗議を無視し，ジャジーラによって10月に収録されたオサーマのインタビューを単独放送する。ジャジーラは当初，このインタビューが同局の基準にあわず，報道する価値がなかったため，放送しなかったといっていたが，あとでオサーマ側がジャジーラのチームに対し「受けいれがた

い心理的圧力」をかけてきたため放送を見送ったと述べ，前言を撤回している[注47]。

おわりに

2002年になって，オサーマ・ビン・ラーデンの名前は急速にメディアから消えつつある。とりわけパレスチナ問題が緊迫の度を高めるにつれ，その傾向は強まっている。またオサーマおよびカーイダ幹部の行方についても正確な情報は入っていない。

しかし，報道，とくにアラビア語メディアには，しばしばオサーマに帰される声明などが登場する。だが，いずれも本人のものかどうか断定はできない。筆者が確認しているのはいずれも電子メディアのものであり，写真どころか，筆跡その他，ほとんど証拠となるものは存在しない。たとえば，alneda.com には，オサーマのほかターリバーンの指導者，ムッラー・ムハンマド・オマル，アイマン・ザワーヒリーらの名前で，死亡したクウェート人ウラマーを悼む声明が掲載されている。

また2002年３月28日付『クドスルアラビー』紙は，オサーマからきたとする電子メールのテキストを掲載した[注48]。同紙編集長のアブドゥルバーリー・アトワーンは，電子メールが本物であるとし，その理由として「文体や用語」がオサーマの他のメッセージと一致することを挙げている[注49]。文体的な一致を判断するのは筆者にはできないが，たしかに用語の点では，コーランの引用も含め，一致する点を見出すことができる。ただし，年号の表記で西暦が優先されている点には若干疑問符をつけていいだろう。筆者が知るかぎり，彼の声明では西暦よりもヒジュラ暦が先にくることのほうが一般的だからである。

一方，2002年４月には，直接オサーマからではないが，カーイダから悪化するパレスチナ情勢に関連して，イスラーム共同体およびパレスチナの英雄たちに書簡が出されたと報じられた。その書簡によれば，オサーマは安全・無事に生活しており，きたるべき段階のためにそなえているという[注50]。

以上，1993年以降に発表されたオサーマ・ビン・ラーデンの声明・発言を時系列的に瞥見してきた。本稿ではアラビア語と英語のメディアを主としてあつかったが，ウルドゥー語など他言語のメディアについては包括的に集めることができなかった。本稿は主だったオサーマの発言を洗い出すことを目的としているが，その意味ではまだまだ不充分である。未曾有の悲劇を生み出したテロ事件の本質を究明するためには，より広範なテキスト収集とより精密なテキスト分析が必要になるだろう。

（注１） 第１表に挙げたもの以外では，たとえば中村覚によれば，1996年５月25日付『シャルクルアウサト』紙，同年６月11日，同年７月11日付『クドスルアラビー』紙にもオサーマの発言が掲載されているが，残念ながら本稿執筆までには入手できなかった（中村覚「反米のシンボルとしてのビン・ラーディン」〈『現代の中東』No.26，1999年〉58〜77ページ）。なお，日本語の著作としては中村論文のほか，保坂修司『正体―オサマ・ビンラディンの半生と聖戦―』（朝日新聞社，2001年），中田考『ビンラディンの論理』（小学館文庫，2001年），石野肇『ウサーマ・ビン・ラーディン―その思想と半生―』（成甲書房，2001年）を参考にしている。

（注２） *Boston Globe,* Sep. 26, 2001.

（注３） “Bin Laden: Notre but, la révolution islamique,” *France Soir,* Aug. 27, 2001.

（注４） オサーマ自身は英国に行ったことを否定している（*al-Quds al-‘Arabī,* Nov. 27, 1996）。

（注５） 番組内容はオサーマを含むサウジアラビア反体制派全般に関するもので，後半部分にオサーマの発言が収録されている。

（注６） Jamāl ‘Abd al-Laṭīf Ismā‘īl, *Bin Lādin wa al-Jazīra wa...Anā,* Dār al-Ḥurrīya.

（注７） “Publishers of book on bin Laden charged,” *AP,* Feb. 2, 1999.

（注８） *al-Quds al-‘Arabī,* Nov. 27, 1996.

（注９） “Bayān 3,” *Mādhā Taqūl Lajna al-Difā‘ ‘an al-Ḥuqūq al-Shar‘īya fī al-Jazīra al-‘Arabīya,* London, 1994, p.220.

（注10） Mamoun Fandy, *Saudi Arabia and the Politics of Dissent,* New York, St. Martin’s Press, 1999, Chapter 6. また石野肇は，声明が22号まで出ているとしている（石野「ウサーマ・ビン・ラーディン…」198～199ページ）。

（注11） *La Repubblica,* Oct. 17, 2001（書簡の英語抄訳は，“Attack on Afghanistan: ‘Kill, fight, create traps to destroy the intruders’: Extracts from the letters allegedly written by Osama bin Laden,” *Guardian,* Oct. 18, 2001）

（注12） このファトワーについても保坂『正体…』を参照のこと。またロザリンド・グウィンによるさらに詳細な分析もある。ただし，同論文は本稿執筆時にはまだ草稿段階である。

（注13） 「インドも『聖戦』の標的に」時事通信，1999年９月18日。

（注14） *al-Jazīra,* Jan. 10, 2001 (“Osama bin Laden says he is pained by occupation of Jerusalem,” *AP,* Jan. 11, 2001).

（注15） なおRealMediaファイルはイスラーム監視センターのウェブ下にあるオマル・アブドゥッラフマーン（1993年の世界貿易センター爆破事件で収監中）の釈放を要求するページにあったが，2001年12月１日現在，アクセスできなくなっている。このビデオはRMではなく，RAMファイルのため，ローカルのハードディスクにダウンロードして保存できない。したがって現時点では内容に関して確認できない状態になっている。事件後，オサーマ関係の情報を提供していたウェブサイトの多くが閉鎖されており，プロバイダーなどに何らかの圧力がかかった可能性がある（保坂修司「アラブ・メディアからイスラームを読む」〈『中央公論』2002年１月号〉参照）。

（注16） たとえばhttp://www.cnn.com/SPECIALS/2001/trade.center/binladen.section.htmlを参照のこと。

（注17） *al-Ra’y al-‘Āmm,* June 19, 2001.

（注18） http://www.ciaonet.org

（注19） 「ラディン氏が関与を否定　パキスタン紙に声明」共同通信，2001年９月12日。

（注20） “Pakistani editor confirms getting Osama letter,” *DPA,* Sep. 12, 2001. ただし，上記の共同通信では電話で声明を読み上げたことになっている。他の報道では電話について触れられていない。

（注21） 同じ部分をイスラエルではなく「ユダヤ人」とする報道もある（たとえば，http://rediff.com/us/2001/sep/12ny15.htm）。

（注22） テキストは『シャルクルアウサト』紙によった（*al-Sharq al-Awṣat,* Sep. 17, 2001）。一方，『ハヤート』紙はAFPを引用し，声明オリジナルの写真を掲載している（*al-Ḥayā,* Sep. 17, 2001）。

（注23） “News agency receives purported bin Laden message,” *CNN,* Sep. 24, 2001.

（注24） “Bin Laden calls Pakistanis to arms,” *BBC,* Nov. 1, 2001.

（注25） 保坂『正体…』148～149ページ。

（注26） *Washington Post,* Sep. 28, 2001. バスマラが出ているというのは『ワシントン・ポスト』に掲載された抄訳によった。この「指令書」はFBIのウェブサイトで公開されているが，不思議なことにバスマラが出ているはずの第１ページ目のみが見当たらない。なお『ワシントン・ポスト』の訳ではバスマラのあとに「神，わたし，わたしの家族の名によりて」というこれまたイスラーム的には奇妙な文句がつづくことになっている。

（注27） “Full text of Pakistani paper’s “exclusive” interview with Usamah Bin-Ladin,” *BBC Monitoring,* Sep. 29, 2001.

（注28） *Dawn,* Nov. 10, 2001.

（注29） *Ausaf,* Nov. 11, 2001 (*BBC Monitoring,* Nov. 12, 2001).

（注30） *Sunday Telegraph,* Nov. 11, 2001.

（注31） コペンハーゲン大学のムハンマド・ジャーヴェドからの電子メール（2001年11月14日付）。

（注32） "Ḥiwār ma'Bin Lādin," *al-Ḥuqūq,* No. 123 (1997), p. 3.

（注33） 保坂『正体…』203ページ。

（注34） オサーマの思想的な遍歴については保坂『正体…』を参照のこと。ちなみに1996年に行われた『クドスルアラビー』のインタビューでは，インタビュアーはオサーマに対し「（オサーマが）パレスチナ（問題）ではなく，イスラームの問題を優先しすぎており，多くの人がその立場に反対しているが，これに対しどう答えるか」と質問している。この質問は当時のアラブ人の一般的な対オサーマ認識を鮮明に表わしているといえるだろう（*al-Quds al-Arabī,* Nov. 27, 1996）。こうした疑問に対しすでにオサーマは早い時点でパレスチナ問題に強い関心をもっていたとする説もあり，その証拠としてアブドゥルアジーズ・ビン・バーズへの1994年12月29日付書簡がインターネット上で公開されている（http://www.alneda.com）。これは忠言と改革委員会の名で出されていることから，同委員会声明の可能性がある。

（注35） 井筒俊彦訳『コーラン』岩波文庫。

（注36） なお有名なアラビア語の小説，*Wā Islāmāh* を書いたのは 'Alī Aḥmad Bā Kathīr で，これは一部のアラブ諸国では学校の副読本になっている。ちなみに著者は，ビン・ラーデン家と同じハドラマウトの血をひく。なおこの小説は現在インターネット上で中町信孝によって邦訳が進行中である（http://www17.u-page.so-net.ne.jp/ga2/nobuta/waislama00.html）。

（注37） *Sunday Telegraph,* Nov. 11, 2001.

（注38） "Responsibility for the Terrorist Atrocities in the United States, 11 September 2001," *10 Downing Street Facts,* Nov. 14, 2001.

（注39） *al-Sharq al-Awṣat,* Nov. 30, 2001.

（注40） "al-Jazeera Acknowledges Bin Laden Tapes," *AP,* Dec. 14, 2001. なおこのビデオは，後述のように2002年１月31日に CNN によって全世界に放映された。

（注41） 明らかな間違いは筆者が把握しているかぎり，ひとつだけであり，それも全体に影響を与えるようなものではない（muhājirīn〈移住者〉とすべきところを mujāhidīn〈聖戦士〉としている。ただし画面で確認したわけではなく，転写テキストと比較しただけである）。充分信用に足る訳であるといえるだろう。日本のメディアによる邦訳の大半は英語意訳を定本としており，残念ながら学術的な使用には耐えない。

（注42） くわしくいうと，このビデオのテキストはアメリカ政府による⑴英訳，および⑵その英訳と並行するアラビア語，⑶アラビア語転写という三つがある。⑶の転写版についていうと，たとえば，*al-Sharq al-Awṣat.* Dec. 15, 2001, *Ahrām,* Dec. 15, 2001などにフルテキストが掲載されたほか，アメリカ政府のウェブでも読むことができる（http://www.usinfo.state.gov/arabic/tr/bnladen.htm）。

（注43） 宗教学者のアリー・サイード・ガームディー，聖戦士のアブースレイマーン・マッキー（別名ムハンマド・アリー・ガームディー），同じくハーリド・オウダ・ムハンマド・ハルビーなどの説がある。アイマン・ザワーヒリーの女婿であるとの報道もあった。ガームディーという名前はサウジアラビア南部を中心に幅広く分布するガーミド部族の出身という意味である。ハイジャック犯19人のうち15人がサウジ人で，しかもそのうち６人がサウジアラビア南部の出で，おまけにガーミド族のものも含まれていたことに注目。またハルビーであるなら，ハルブ族に属していることになる。こちらはガーミドと異なり，サウジアラビア中部の有力部族である。

（注44） この会談のなかで名前の挙げられた宗教者たちのファトワーのいくつかは alneda.com のなかで読むことができる。

（注45） フィクフ（fiqh）という訳は英訳にもとづいている。アラビア語転写テキストではフィクハー（fiqhā）となっている。

（注46） テキストは http://www.aljazeera.net/news/asia/2001/12/12-27-18.htm。

（注47） *al-Sharq al-Awṣat,* Feb. 2, 2002.

（注48） *al-Quds al-'Arabī,* Mar. 28, 2002. 内容はパレスチナ情勢についてのもので，サウジアラビアのアブドゥッラー皇太子による中東和平提案を「大い

なる裏切り khiyāna ‘uẓmā」と糾弾している。

（注49） “Paper ‘receives Bin Laden e-mail,’ ” *BBC,* March 28, 2002. BBC によれば，クドスルアラビーは，有力な手がかりとなりうる電子メールのアドレスや送付経路について明らかにしていない。

（注50） *al-Ḥayā,* Apr. 9, 2002. 電子メールのテキストは http://www.alneda.com.

（ほさか　しゅうじ／早稲田大学エジプト学研究所
客員研究員）